

白山ふるさと文学賞

第二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

命が生きている

美川中学校二年

構 かまえ

ひな子

受賞の言葉

私は、自分で物語を想像したり、つくったりすることが好きです。だから、自分の作品を認めてもらうことができ、すごく嬉しいです。もっと上手な文章をつくれるよう、これからもたくさん文をかいていきたいです。

「今日は暑い日ねえ。セミがジージー鳴いているよ。」

なのに、わざわざクーラーもなさそうなもつと暑いところに、セミが大量にいてもつとジージーうるさそうな山奥に行くなんて。

「はいはい、しかたないでしょ。お墓参りして、挨拶にも行かなきゃいけないんだから。」

母になだめられながら、クーラーガンガンの車でおばあちゃんの家に向かう私は、ご機嫌ななめだ。去年の夏は、もう古いエアコンが全然効かなくてそこらじゅうの戸を全開にしたものの、やっぱり暑さには耐えられない。しかも戸を全開にしたおかげで蚊に刺されまくって、かゆい目に合った。そんな苦い思い出もあってなかなか気が進まない。ぐずつていた私はつまらなくなつて外を眺めているうちに寝てしまった。しばらくして目を覚ますと、辺りはさつきまでと一変して緑に囲まれていた。進めば進むほど、巨大な木が迫ってくるようで不気味だ。入ってしまったら抜け出せなくなるんじゃないかと思うくらい、車は山の奥まで進んでいった。おばあちゃんの住む村は、家がポツポツと離れて建っているうえに子供はいないに限りなく近い。だから聞こえてくるのはセミの鳴き声と川の水がドバーツと流れる音だけだ。見えるのは、田んぼと畑。それに、大きな大きな木々、車から降りると太陽がジリジリと照りつけ熱風が襲いかかってくる。

「あつっーい。暑くて死にそう。」
今年はこの言葉を何回言ったことか。口癖になっている。おばあちゃんの家は去年と違つて締め切つてあつた。

「お母さん、ただいまー。」
ガラガラーと大きな戸を開けてみると中から

「はいはい。」

という声が聞こえた。平屋建てで広い玄関。木造の古い家だ。中は薄暗く、外との光の差でまだよく見えない。

「いらつっしやい。暑かつたね。」

と出てきたのは、大きくて、腕も足もまん丸のやさしいおばあちゃんだ。居間に入ると、ひんやりと冷たい空気が流れていて気持ちがいい。タオルを首に巻きながら、おばあちゃんは、汗を流している。

「エアコン、新しいのにしたんだよ。さすがに今年は暑いからね。」
「ああ。そうなの、良かったわねさわ。ずっと居間にいなさいよ。」
暑さが消えれば言うことなした。山もおばあちゃんも大好きなのだから。

「さわ、今日は刺身にするか。」
「うん。刺身食べたい。」

「じゃあ、魚さばこうか。」

台所は居間ほどじゃなかったけど、日が差してなくて意外に涼しかった。その分薄暗くて外の明るさが目に痛かった。

「さわ、さばくか。」

目の前には、大きい魚が丸ごとまな板の上ののつて死んでいた。

「え。いい、気持ち悪くて触れないし。」

「気持ち悪いってなんだ。これを食べるんだよ。」

おばあちゃんは大きな手で力強く魚を切っていく。

「かわいそう。さつきまで泳いでいたのに。人間に捕まったら終わりだよね。」

目の前の魚はどんどん跡形もなく身だけになってお皿に並べられていく。
「かわいそうなんて言うんじゃないよ。さわも、ばあちゃんも食べていけないと生きていけないんだよ。」

「でも、せつかく生まれてきたのにこんな簡単に死んじゃうなんて。」

私は心の底からかわいそうだとしか思えなかった。

「かわいそう。じゃなくて、ありがとう。つて言え。命を頂いて、ありがとう。じゃないんか。」

その言葉は、いつもの適当で、大らかなおばあちゃんとちよつと違つた。

おばあちゃんの大きな背中と手には命を大切にする暖かみを感じた。そ

の大きな背中がもつと大きく見える。

「これから、もつとたくさん命を頂いていくんやから感謝して食べていかんとね。」

「うん。」

刺身はいつもより新鮮で生き生きとしておいしそうに見えた。次の日、家族でお墓参りに行った。お墓はおばあちゃんの家の裏にある。古いはずなのに、ピカピカに磨いてある。

「このお墓には、ご先祖様がたくさんいるのよねー。」

お母さんが手を合わせてから言った。

「そうだ。おばあちゃんの兄弟もたくさん眠つとるんよ。」

「そうよ。お母さん十人くらい兄弟いたのよね。」

「まあな。ほとんど小さい時に亡くなったけどな。」

知らなかった。おばあちゃんのはてつきり三人姉妹だと思っていた。

「あつ。さわは知らなかったつけ。昔は食べ物もろくに無いから栄養失調で亡くなるのよ、みんな。」

「まつ、今は食べ物もいっぱいあるけどなあ。大事にせんないかんよ。」
おばあちゃんはもう一度手を合わせた。その後ろ姿はいつもより小さく見えた。

「人だけじゃなくて、虫にも木にも魚にも命があるんだよ。大切にしないとね。」

「そうねー。それでお母さん、食べ物は大切に。って残さず食べてこんなに太っちゃったのかしら。」

母は軽い調子でいつものように笑っている。

「そうだな。さわも食べ物を大事にして食べ過ぎるとばあちゃんみたいになるかもな。」

「おばあちゃんもドカドカ笑っている。命っていいな。命がないと、こんな素敵な世界はないんだから。」

「優子、もう帰るんか。」

「そうね。もうそろそろ帰らないと。」

「じゃあ、スイカ持ってけ。井戸のところに冷やしてあるから。」

「えっスイカ。ありがとう。じゃあさわも荷物積んでね。」

「うん、わかった。」

こんな会話ができるのも命があるからだよね。やっぱり命って素敵。うるさいセミの鳴き声も、一生懸命生きている証。生い茂る木も私よりもおばあちゃんよりも昔からずっと生きて大きくなって。セミの鳴き声が、木が風で揺れる音が、川の水が流れる音が、おばあちゃんも、

「またおいで。」

そういつてる。

「また来るね。」

